東京都

TOSHIMA
International City of Arts & Culture

ARTS COUNCIL TOKYO

オノコロ

としまアートステーションのつくりかた

としまアートステーションZのつくりかた
目 次

P. 3
1.「考える」編
1. としまアートステーション構想とは
2. この冊子について
3. としまアートステーションZとは
4. Zはこんな場所であってほしい
5. そのために何が必要か

P. 9
2.「つくる」編
1. セルフカフェ・情報発信
• モノ・道具
• 役割・ふるまい
• 大切にしていること
2. 作業日
2-1. 作業日
• モノ・道具
• 役割・ふるまい
• 大切にしていること
2-2. 作業グループ
• モノ・道具
• 役割・ふるまい
• 大切にしていること
3. アーティストによるプロジェクト 「EAT&ART TAROプロジェクト」
• モノ・道具
• 役割・ふるまい
• 大切にしていること

P. 23
3.「残す」編
1. 記録と評価の目的
2. 記録と評価の方法
• 全体の傾向を探る方法
• エピソードを残す方法
• 活動をフォローする方法
• 定期的なモニタリングと軌道修正の方法

P. 29
4.「まとめ」編
1. としまアートステーションZのつくりかた
2. 作業日サポートガイドライン
3. スタッフの声（座談会）

P. 41
付録 資料編
1. 来場者一覧とアンケートの分析
2. オープン日、作業日、「EAT&ART TARO プロジェクト」実施日一覧

1. 考える編

Ⅰ. としまアートステーション構想とは

アートを生み出す小さな拠点を、「アートステーション」と呼ぶことにしました。

アートはもともと「技」の意味。人の手によって何かを生み出す技がアートです。絵画や彫刻をつくるばかりでなく、日常のなかにほっとする、またはぎょっとする異空間を生み出すのもアートです。だから、アートとの関わり方は、きれいな「モノ」をつくったり、美術館で鑑賞することだけに限りません。もしかしたら、それはみなさんの生活のなかに紛れ込んでいて、普段やっていることや、これからやろうとしていることの、すぐ近くにあるかもしれません。

ふつう、ステーションといえば鉄道の駅。だけど、他にもいろんな機能をもつ「○○ステーション」があります。宇宙ステーションは宇宙の研究や実験をする最前線。ガスステーションは燃料を補給するところ。ラジオステーションは番組を発信する基地局。ナースステーションは看護師さんの詰所。アートステーションは、アートをめぐって研究や実験をしたり、補給や発信をしたり、人が集って話し合ったり、その他いろんな機能をもつ場所になるでしょう。

© yabe akiko

わたしたちオノコロのいる「としまアートステーションZ」は、そんな拠点の一例です。わたしたちは、ここでイベントの開催や情報発信をしながら、アートを生み出す小さな拠点が、それをほしいと思った人の手で、街のあちこちにできたらいいなと思っています。

豊島区にアートステーションが増えてほしい。
わたしたちは、みなさんがさまざまな使い勝手の拠点をつくるお手伝いをします。

2. この冊子について

この冊子は、2014年4月〜2016年3月の2年間、「としまアートステーションZ」を舞台に、事務局スタッフ、アーティスト、ボランティアの「オノコラー」、そして、来場者とともに行ってきた日々の実践を振り返り、わたしたちが何を目指し、何を考え、何をしてきたのかをまとめたものです。

これは、アートステーションのつくりかたの「正解」を書いた教科書ではありません。あくまでも、わたしたちの「仮説」と「実験」と「結果」を書いたものです。これから「としまアートステーションZ」に関わる人に、あるいは、どこかでアートステーションをつくろうとしている人に、自分ならどうするだろう?こんなやりかたもあるんじゃない?と考えていただくための材料になればと思います。

3. としまアートステーションZとは

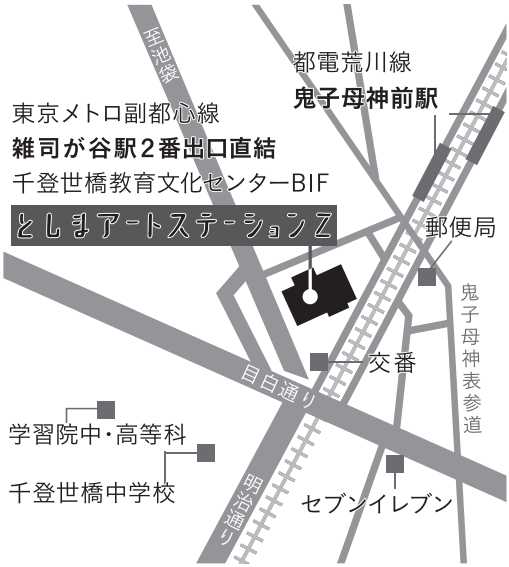
――あなたの「準備」ここでできます。――

「としまアートステーションZ」は、モヤモヤ考えたり、思いつきを試したり、失敗できたりする場所です。

その経験は、ゆくゆく何かをはじめたり、0から1を生み出したり、1+1を2よりも大きくしたりするための「準備」になるかもしれません。

Zは、目的がはっきり決まっている人も、まだ決まっていない人も、自分なりに「準備」のできる「準備室」でありたいと思います。

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷3-1-7
千登世橋教育文化センターBIF
東京メトロ副都心線「雑司が谷」駅 2番出口直結
都電荒川線「鬼子母神前」駅より 徒歩2分



※内容は執筆当時。現在のオープン時間、プログラムについては、としまアートステーション構想ウェブサイトをご覧下さい。www.toshima-as.jp

4. Zはこんな場所であってほしい

わたしたちは、Zを、ひとつのコミュニティ（仲良しグループ）にしないことを心がけてきました。「え？コミュニティをつくるんじゃないの？」と意外に思われるかもしれません。その理由は、Zが、いろんなコミュニティが共存し、その枠組みを越境して人と人とが出会う場所であってほしいと思っているからです。

としまアートステーション構想のコンセプトブックには「用意される公共から主体性のある公共へ」というフレーズが載っています。「公共」って何でしょうか。「コミュニティ」とは何が違うんでしょうか。「コミュニティ」が、気心の知れたメンバーズクラブだとすれば、「公共」は、まったく知らない誰かや違う価値観を持った人とも鉢合わせる場所です。だから、自分の価値観や立ち位置をかき乱されたり、不快感を感じたりすることもあれば、思いがけず世界が拓けるような出会いもあるでしょう。

Zは、そんな「公共」を、誰かに用意してもらうのではなく、ひとりひとりが主体的につくりはじめる拠点でありたいと思います。

5. そのために何が必要か

Zが、主体性のある公共の生まれるところであるために、何が必要なのか考えてみました。

人々が集まる

まずは、多様な人々が集まることが大事だと考えました。「アート」なんて名前がついているので、作品制作をしている人しか行けない場所と思われがちですが、ふらっと立ち寄ってもらいたい。アートや地域活動に関心のある人だけでなく、そうでない人も来たくなる場所でありたい。そのためには、特定のコミュニティによって物理的にも雰囲気的にも占有されず、特定の過ごしかたや使いかたを強制しない、開かれた環境が必要です。

個性が現れる

多様な人々が集まったその次は、それぞれの個性が現れることが大事だと考えました。例えば、興味のあることについて話してくれたり、やりたいことを試してみたりというように、その人が自分を表現してくれたら、個性が見えてくるんじゃないかと思いました。そのためには、上手い下手や、プロかアマかや、完成か未完成かに関係なく、とにかくやってみることが歓迎される環境や、誰かが自分の表現を受け止めたり反応を返してくれる環境が必要です。

つながる

それぞれの個性が現れたその次は、その個性どうしがつながることが大事だと考えました。活動をはじめたり、それを続けたりするのは、ひとりの力ややる気だけではなかなかうまくいかないものです。他の人と一緒にやってみることで、やりたかったことが実現できたり、続けていくことができたり、思いもよらない方向に発展したりします。そのためには、いろんな性格、特技、視点、ニーズを持った人たちがグループやネットワークをつくることができる環境が必要です。

多様な人々が集まり、それぞれの個性が現れ、個性どうしがつながる。この3つのステップを実現するための具体的な工夫を、この冊子では紹介していきます。

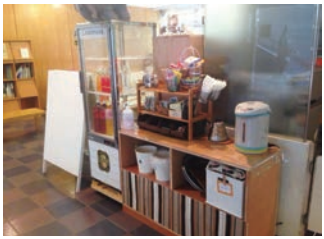
2. つくる 編

Ⅰ. セルフカフェ・情報発信

まずは、とにもかくにも人が集まってくれないと何もはじまりません。どんな世代の人でも、どんな性別、国籍、境遇の人でもふらりと立ち寄ってもらえるような場所にしたいと思いました。そのために2014年～2015年度はセルフカフェと情報を発信する機能を設けました。

としまのつぶやきマップ

来場者と双方向のコミュニケーションを取るために、壁に大きな豊島区の地図を貼っています。お気に入りの場所や身近で起きたちょっとした出来事など、マスメディアには載らない「つぶやき」が集まっています。

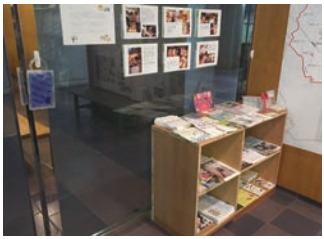


飲み物とお菓子（セルフカフェ）

初めての人にもアートになじみのない人にも、まずは気軽に入ってもらうために、飲み物とお菓子を用意しました。持ち込みもＯＫです。

本棚

全国各地のアートプロジェクトのドキュメントや報告書、アートや地域に関連する書籍、フリーペーパー、漫画など、スタッフや来場者が持ち込んだものを集めた共有の本棚。これも情報提供という側面だけでなく、スタッフと来場者のコミュニケーションツールにもなっています。

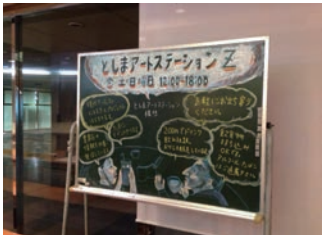


チラシ

地域活動やアート活動への入口として、豊島区はもちろん全国各地の地域・アート関連のチラシを設置しています。来場者の興味関心に合わせて活動やイベントを紹介したり、チラシの話をきっかけに来場者の興味関心を知ったりするなど、スタッフと来場者のコミュニケーションツールにもなっています。

ショップカード

Ｚの基本情報と今年度のプログラムを案内する簡単なカードです。Ｚの来場者に渡しているほか、区内の施設や店にも設置しています。友達などを誘う際にも使うことができます。



黒板

全面ガラス張りとはいえ、初めての場所にはなかなか入りづらいもの。どんな場所なのかを知らせるために黒板を出しています。Ｚをどんな言葉で表現したらよいかは試行錯誤中。みなさんも一緒に考えてください。

■役割・ふるまい

スタッフ

オープン日の鍵やレジの管理をする責任者。来場者に声がけしたり、来場者どうしをつないだり、全体を見渡したり、としまアートステーション構想に興味を持ってくださった人に、活動内容を説明したりしています。Zの運営に関わるオノコラーを見守ったり、相談に乗ったりもします。

オノコラー

スタッフとともにZを一緒につくっていくボランティア。それぞれの個性や得意なことを活かして関わっています。Zに入ろうか迷っている人に積極的に声をかけて呼び入れてくれる人もいれば、自ら黙々と作業する人、友達を連れてきてくれる人まで、いろんな関わりかたがあります。

常連さん

オープン日を重ねることに、顔見知りの関係から挨拶や世間話を交わすようになるなど、来場者との付き合いも深まっていきます。Zには、現在、毎週お昼休憩に来る人、自身の作業をよく持ち込んでくれる人、スタッフやオノコラーとおしゃべりしに来る人など、さまざまな常連さんがいます。なかには、カフェをきっかけに来場した人が、他のプログラムに参加するようになったり、オノコラーになったりするケースもあります。

新規の来場者

通りがかってふらっと立ち寄る人からZをめがけて来る人まで、新しい人を常に歓迎しています。顔ぶれが決まってしまうと内輪感が出たり予定調和になりがちですが、Zがよい意味で色が定まらない場所、思いがけない場所であるために、新しい顔ぶれが出入りし、新陳代謝が活発であることはとても重要です。

■大切にしていること

Zはいわゆる飲食店と違うので、来場者が入ってきてくれるときに「いらっしゃいませ」とは言わないようにしています。挨拶は「こんにちは」や「こんばんは」。来てくれた人と同じ目線でいたい、それが話しやすさにつながったらいいなと思っています。

どうしても人が集まりはじめると、自分たちの仲間だけでZを使いたくなってしまうことがあるかもしれません。でも、Zがオープンしている間は、なるべくいろんな人たちが入ってくることができる余白を残しておきたいので、占有はお断りしています。みんなにとっての居場所、公園みたいなものですね。占有はできませんが、

自分とはまったく違うことをしているお隣さんが気になったら、もしかしたら話を聞いたり一緒に何かできたりするような可能性が広がるかもしれません。

Zには座り心地のよいソファも、マスターが煎れる特別なコーヒーもありませんが、多様な人がそれぞれ自分らしく関われるようにすることで、過ごしやすさや居心地のよい場所になるのではないかと思っています。

さぁ、Zにいろんな人が集まってきてほしいイメージ、少しでも湧いてきたでしょうか？

2-1. 作業日【作業日】

人が集まってきたところで、次に気をつけているのは、一人ひとりの個性が現れてくるようにすることです。そのために、Zでは「作業日」をはじめました。その名の通り、作業をする日です。作業といっても、何かをつくったりする工作のような手作業だけをいうのではなく、読書や考えごと、おしゃべりなども作業です。目的がはっきり決まってる人も、まだ決まっていない人も、自分なりの作業であれば、どんなものでも持ち込むことができます。

■モノ・道具

広いテーブル

入口付近のテーブルを、あえてバラバラにせずにくっつけているのは、隣で作業している人を気にかけてみたり、話しかけてみたり、席を譲り合ったりするなど、たまたま居合わせた来場者同士のコミュニケーションを促すため。また、その雰囲気を通りすがりの方にも感じていただくためです。奥には、ひとりや少人数で集中できるテーブルもあります。

道具（文房具、工具、手芸用品、電源、Wi-Fi）

Zにさまざまな作業を持ち込んでもらうために、また、「やってみたい」という気持ちを刺激するために、いろんな道具を提供しています。自分の作業のための道具や素材を置いておくこともできます。どんな道具を用意したらどんな人が来てくれるか、考えて試してみるのもよいかもしれません。

素材（要らなくなった紙、布、毛糸）

素材は各自持参が原則ですが、ふらっと来て作業に参加する人のために、いろんな廃材を用意しています。ゴミの削減にもちょっとは役立っているかな。

誰かのつくりかけのもの

作業日でつくったものやつくりかけのものは、Ｚに置いておくことができます。それを見た別の来場者が、Ｚにどんな人が来てどんなことをしているのか垣間見たり、続きに手を加えてみるきっかけになっています。「Ｚにはこんな人が来ているんですよ」と来場者に説明する際にも、モノがあるとイメージが伝わりやすく、助かっています。

キッチン

Ｚは以前「トシマサロン」という食堂・レストランでした。そのため、入ると正面に大きなキッチンが見えます。設備は少々古くなっていますが、みんなで何かをつくったりするにはもってこいの広さです。食を切り口にいろんな実験を試みています。

「日々のＺ」の掲示

通りすがりの方や、Ｚが休みの日の来館者に、Ｚがどんなところか知ってもらうために、オープン日の出来事について、写真とコメントを外に向けて掲示しています。Ｚの中にある「日々のＺ」ファイルや、Facebook ページでも、同じものを読むことができます。

■役割・ふるまい

スタッフ

来場者が思い思いに作業できる環境づくりを担います。Zにある道具を勧めてみたり、「日々のZ」やZに残されたつくりかけのものなどを見てもらいながら、他の作業の例を紹介したり、興味が近そうな人を紹介したりしています。やりたいことがモヤモヤとしている人の相談に乗ったり、試しに何かを一緒にやってみることもあります。

オノコラー

実際にやりたいことをやっている人や参加している人が目の前にいると、他の人も「やってみようかな」「参加してみようかな」という気持ちになります。オノコラーは、そんなふうに来場者の一歩前を行く存在として、率先して作業したり、他の人の作業に加わったり、モヤモヤ考えたりしています。たまたま居合わせた来場者に声かけして、自分の作業に招き入れるオノコラーもいます。

来場者

やりたいことがある人や、まだ具体的には決まっていないけれど何か面白いことを探している人は、Zで試しに何かはじめてみることができます。ゼロから自分ではじめる人もいれば、他の人がやっている作業に加わってみる人、まずはスタッフや他の来場者と相談してみる人など、いろんな入口があります。

■大切にしていること

作業日では、自分がしたい、やってみたいという気持ちがとても大切です。その気持ちさえあれば、とっかかりになる材料や話を聞いてくれる人、一緒にやってみてくれる人、遠くから応援してくれる人などがいるからです。自分の考えたことなので、可能な限り自由に、そしてきちんと責任を持って、活動をはじめてほしいと思います。

2-2. 作業日【作業グループ】

作業日で活動が盛り上がってきたら、自分ひとりではなく、たくさんの人とやってみたくなったり、仲間を見つけてみたくなったりするかもしれません。いろんな人に意見を聞いて話し合ったり、道具や技術をシェアしたいと思うかもしれません。Zでは、そんな集まり＝グループができることで、アイデアが広がり、実現してほしいと思っています。

■モノ・道具

黒板

Zの入口にある大きな黒板では「今月のイベント」を紹介しています。作業グループの活動日時、アーティストのプログラムの日時や、ちょっとしたお誘いコメントが書かれています。

掲示板

Zで活動するグループの活動紹介やメンバー募集、告知などを貼ることができる掲示板があります。「なんだろう？」と興味を持ったり、人に聞いてみたりするきっかけをつくるためのものです。

卓上ポップ

作業日、特にグループ活動の日には、テーブルにポップを立てることを奨励しています。ポップには、日付、活動名、今日やることを書きます。そのグループがどんな作業をしているのか来場者に知らせるため、そして、もし興味を持った人がいれば参加してもらいやすくするためです。

■役割・ふるまい

スタッフ

主体的に活動したい人をサポートするために、あの手この手を考えます。話を聞いてみたり、一緒にやってみたり、正反対の意見を言ってみたり、誰かを紹介してみたり。ときにはオノコラーさんもその役割を担ってくれます。でも、あくまで一番尊重するのは主体的にやりたいと思った人の気持ちです。

企画者タイプの主体者

作業グループをサポートしていくなかで、グループを構成するオノコラーや来場者には、大きく2種類のタイプの主体者がいることがわかってきました。ひとつめは企画者タイプ。興味のあることや実現したいこと、それに対する強い熱意を持っていて、自分のプランを実現することに喜びを感じるタイプです。企画者タイプの主体者がいることで、グループ活動の軸やコンセプトが明確になります。

運営者タイプの主体者

もうひとつは運営者タイプ。誰かが熱意を持って取り組んでいることに寄り添って、自分の得意な役割を担うことに喜びを感じるタイプです。このタイプの主体者のなかには、グループ全体のバランスを見て、雰囲気づくりをしたり、足りていない部分を補うメンバーを巻き込んだりと、俯瞰的な視点でグループの運営に関わることが得意な人もいます。運営者タイプの主体者がいることで、企画者ひとりではできないことが実現できたり、企画者のアイデアがひとりよがりでないものになったりします。

■大切にしていること

グループ活動をサポートするときにわたしたちが大切にしているのは、その活動が「はじめたい人にとってどんな準備なのか」、「他の人にとっての準備にもなっているか」、「複数人でやりたいことなのか」という点でした。これは、やってみたいと思った活動を他の人へも広げるときに、その本質をその人と一緒に確認することがとても重要だと思っているからです。まず、はじめたい人のモチベーションがないと何事もはじまりませんし、それを他の人ともやってみたい理由がないとグループでの活動には発展しません。これを確認するためにはいろんな対話をします。この対話が活動の芽の水や肥料になったらいいな、と思いながら日々繰り返しています。

3. アーティストによるプロジェクト「EAT&ART TARO プロジェクト」

Zにおいて、自分のやりたいことや興味関心を主体的に形にしていくという具体的な例を、2014年度は、アーティストEAT&ART TAROさんとつくることにしました。特に今までなかなかうまく使われていなかったZのキッチンを使ってみることにしました。

アーティストはやりたいことを形にしていくプロフェッショナルです。その人の姿を見て、周りも「わたしも実はこれやってみたかった」と思ってもらえるようになるといいなと思っています。そうして「キッチンスタジオZ〜これ作ってみたかったんだよね〜」が生まれました。

■モノ・道具

レシピ本

「キッチンスタジオＺ」の活動は、レシピ本を眺めておしゃべりするところからはじまります。戦前のレシピや海外のレシピなどを見ていると、芋づる式にいろんな知識や経験談や、「こうなんじゃないか、ああなんじゃないか」という妄想が出てきて、参加者どうしがあっという間に打ち解けます。飛び入り参加者や興味を示してくれた来場者にも、レシピ本を見てもらってスタッフがおしゃべりします。具体的なイメージを持つことで活動をより身近に感じてもらい、参加してみようと思ってもらうためです。

スライドショーと看板

「キッチンスタジオＺ」でつくった料理動画や制作風景のスナップを、外に向けて流し、今日のメニューを貼った看板を出してみました。奥まったキッチンで行われていることを、通りすがりの人にも見てもらいやすくするためです。足をとめて動画を眺めていく人や、スライドショーや看板をきっかけに飛び入り参加する人もいました。

■役割・ふるまい

アーティスト（EAT&ART TARO）

Ｚにおいて、アーティストは、自分のやりたいことや興味関心を主体的に形にしていくお手本のような存在です。また、いつものＺとは少し違った活動や雰囲気を持ち込み、Ｚの新たな側面に気づかせてくれる存在でもあります。

オノコラー・来場者

アーティストの制作プロセスに率先して関わる人たちです。アーティストがワクワクするだけでなく、アーティストに共鳴する人がいるということは、プロジェクトを前進させ、まわりの人を巻き込む力になります。「キッチンスタジオＺ」では、準備、調理、撮影をアーティストと一緒に行い、活動後には、それぞれの目線でその日の出来事をレポートしてもらいました。

スタッフ

アーティストがプロジェクトを進めやすい環境を整えたり、アーティストとオノコラーや来場者をつないだり、通りすがりの人に声をかけて飛び入り参加を促したり、プロジェクトの記録を取ったりしました。

© yabe akiko

■大切にしていること

アーティストが形にしたいイメージをできるだけ多く共有し、いろんな人たちがその活動に参加できるような関わりしろをつくりました。アーティストがZにいて、面白い場をつくっているときは、その場にいる人たちにワクワクが伝播していきます。アーティストがいないときにもそのワクワクの片鱗を感じてもらい、参加してみたいと思うようにあれこれやってみました。そうすると、活動もまた豊かになると思うのです。

3. 残す編

1. 記録と評価の目的

物事をもっとよくしていくためには、記録と評価が必要です。日常生活でも、自分のやったことを「記憶」しているからこそ、それがよかったのかよくなかったのか「評価」でき、この先どうしたらよいかを考えることができます。ところが「記憶」はどんどん薄れ、勘違いもします。なので、それを後から誰でも見返せるように保存することが大事であり、その保存したもののことを「記録」といいます。

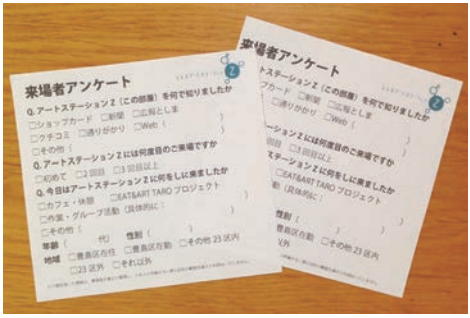
Zにおいて記録と評価が大事である理由として、大きなイベントを開催するフェスティバル型ではなく、小さな毎日を継続していく日常型のプロジェクトであることと、時間を超えて残り、持ち運びもできるモノ（絵画や彫刻など）をつくるのではなく、そのときその場だけで消えてしまう出来事をつくっているという特徴が挙げられます。そのときその場にいた数人の記憶にしかない出来事を記録しておくことで、そのときその場にいなかった人に伝え、この先どうするかをみんなで考えることができます。

以下では、わたしたちが試してみた記録と評価の方法を紹介します。自分なりの視点や新しい方法を考えるためのきっかけになればと思います。

2. 記録と評価の方法

■全体の傾向を探る方法

どんな人が来て、どんなふうに過ごしているのか、来場者全体の傾向を探るために、来場者一覧を作成しています。また、アンケートを取ったり来場者にヒアリングしたりすることで、何がきっかけでZを知ったのか、何をしに来たのかなどの情報も集めています。これらの情報を集計、分析することで、どれくらい多様な人にアプローチできているのか、もっと多様な人に集まってもらうためにはどうしたらよいかなどを考える材料としています。



分析結果は、「付録：資料編　来場者一覧とアンケートの分析」参照。

■エピソードを残す方法

「来場者が何人来た」とか「カフェの売り上げがいくらだった」という数字だけでは、Zで起きていたことの本質を捉えることはできません。来場者がどんなことをしていたのか、どんな話をしたか、それを見て自分はどう思ったか、他の人はどう思ったかなど、それぞれの個性を感じ取ることのできるエピソードも大切な情報です。そうしたエピソードを残すために、毎日クローズ後に「ふりかえり」の時間を設けています。

他の人の書いたものを見ることで、見逃していたことや自分がいなかった日のことを知ることができます。また、自分で書いたものを他の人の書いたものと比較してみることで、初めて自分の目の付け所や盲点に気づくこともあります。Zで起きている出来事や来場者に興味を持ち、自分なりのアプローチを見つけるためにも、ふりかえりの時間を大事にしています。

準備するもの

・A3の紙を2枚貼り合わせたもの
・黒のサインペン
・カラーペン（人数分の色があるとよい）
・紙を保管しておくためのA3のファイル

ふりかえりのやり方

1. スタッフやオノコラーなど、ふりかえりに参加する人が紙を囲んで座ります。
2. 紙の真ん中に日付と天気を書きます。
3. 2の周辺に、その日来場した人物や団体などを、思い出せる限り書き出します。スタッフやオノコラーも含めてください。名前がわかれば、それを書きましょう。わからない場合は「サラリーマン風の男性」「オーケストラのグループ」などでもよいでしょう。
4. それぞれ好きな色のペンを持ちます。ここからは、おしゃべりしながら、わいわいと寄せ書きタイム。
5. 3で書き出した人物や団体名の近くに、その人たちがしていたこと、どんな様子だったか、会話をした場合はその内容や、自分はどう思ったかなどを書きます。
6. 他の人が書いたコメントも読んでみましょう。それを読んで思い出したことや、他の人が書いたことへの付け足し、感想、疑問などがあれば、書き加えます。
7. 一通り話が出尽くしたら、何色が誰かわかるように、紙の端っこに自分の名前を書きます。
8. 紙をファイルに綴じて保管します。
9. 次回当番の日に、自分が来なかった日の出来事を読み返したり、定期的に見返すなどして活用します。また、目的や必要な情報に合わせて、書き方をマイナーチェンジしていきます。

■活動をフォローする方法

来場者と話をしたり一緒に活動したりしているなかで、その人のやりたいことや興味のあることについて、話が盛り上がることがあります。それは、まだ具体性を伴わないアイデア段階だったり、仲間を募集している段階だったり、具体的なプランを立てられそうな実現段階だったりとさまざまです。それらを「活動の芽リスト」にまとめています。

作業グループが生まれたら、グループごとの記録を残していきます。活動日に行った内容はもちろんのこと、活動日に至るまでにグループメンバーが行ったこと(例えば、企画を考える、告知文を書く、友達を誘うなど)や、スタッフがサポートしたこと(例えば、相談に乗る、人を紹介するなど)など、舞台裏で起きていたことも記録しています。

活動名	メンバー（●代表者、○オノコラー）	開催	概要	備考（進め方など）	実施状況
勉強会「日本評価研究」を読む→「アートプロジェクトの残し方・伝え方」	●石橋 岡 ○天羽 ○とおる 矢部 五藤 森 FBで情報共有している遠方の人数名	月1	アートプロジェクトの記録と評価について考える。 ひとまず、石橋と高美さんとで「日本評価研究」というプロジェクト評価の理論と事例を集めた論文誌を読んでみた。オノコラーや他の現場の方にも参加してもらいたいので、マニアックすぎない内容を検討中。 現在の案 ・「アートプロジェクトの残し方・伝え方」にタイトル変更。 ・Zや各自が持っているアートプロジェクトのドキュメントを回し読みして、気になったところを共有する。悩みを共有する。 ・参加者それぞれの現場ではどんな記録・評価がふさわしいかを考える。試してみて結果を共有する、などにつなげていきたい。	新しい内容でオノコラーに呼びかけてみる。Facebookでも呼びかけてみる。 FBのグループ（非公開）を作る。	プレ1回：2014/05/23 プレ2回：2014/6/22 1回：2014/9/27 2回：2014/10/18 3回：2014/11/21 実践編：2014/11/28, 12/5, 12/19, 12/20 5回：2014/12/13
助成金との健康的な付き合い方を考えるゼミ	●五藤 石橋 池田 ○ゆめん ○田中 その他一般参加者	隔週～月1 平日夜か土日午後 1時間半程度	欲しいけれど、とるのも大変。とっても大変。 そんな助成金との楽しく健康的な付き合い方を簿記を通して考えます。 助成金の読み書きそろばん能力の向上が狙い。 一緒に一から考えてくれるゼミ生募集します！ （簿記・経理初心者の方も大歓迎。） 時間の目安：1時間半 開催：隔週、平日夜or 土日午後。曜日は希望者に応じて調整します。	FBグループ（非公開）で情報共有。毎回の記録をアップ予定。 ●業務の分担 ・五藤さん：内容、進め方、広報、スケジュール調整、FB利用していない参加者との連絡 ・事務局：五藤さんが発信する情報のシェア、進め方の相談に乗る、人をつなげる	1回：2014/8/31 2回：2014/9/28 3回：2014/10/24 4回：2014/11/28
DIY	●内野 ○とおる ○たっつん	不定期	（Zに必要な家具を自力で作る。掲示板、チラシラックなど。） モノをつくる前段階（模型など）から準備して、実施に入る。	tumblr で作業で行われたことを共有し、tumblrとFBで告知。メンバーとの共有はGoogleに書き込む。（仮）	1回：2014/07/19 2回：2014/8/1 3回：2014/8/2 4回：2014/8/9

活動の芽リスト

カシオペア印刷

概要	スクリーンプリントをしたい人たちのゆるい集まり。 （目的を共有せず、道具と技術のみを共有する集まり）
開催の目安	不定期。月1～2
代表者	池田
事務局担当者	池田
情報共有の方法など	FBでスケジュール調整。
開催の経緯	デザイナーの濱士さんが印刷好きで、シルクスクリーンやガリ版などの道具を持っていることを知り、シルクスクリーンをやってみたい梅沢と池田で集まることにした。
目標	・方向性1：デザイナーやアパレル関係の人にとって、仕事ではなく、やりたいことをやる場になる。 ・方向性2：「しんぶん部」的な集団になる。個人目線のフリーペーパー発行、Zという場の記録発信の一端を担う。（可能性低いが様子を見つつ検討）

活動記録

日	参加者	特記事項（何が起きたか、事務局はどう介入したか、今後どうして行きたいか）
2014/08/01	3名 池田、梅沢、濱士	・グループ名を「カシオペア印刷」に決定。 ・刷りたい柄などについて話す。案外刷る中身がないことに気づく（池田）
2014/08/08	2名 池田、梅沢	・カシオペアについて調べる。天体や星座、占星術などの話で盛り上がる。 ・濱士さんがいないとただのおしゃべりになることが判明（池田）
2014/09/05	4名 池田、梅沢、濱士、吉田	・FBのチャットグループを作り、スケジュール調整。 ・初めて版を作った。やはり柄に困る ・濱士さんがさらっと「カシオペア印刷」のロゴを制作 ・たまたまたこ焼き消費作業日に来ていた演劇の衣装スタッフの吉田さんが興味を示す。個人的にFBでつながり、メッセージを送ったところ次回から参加してくれることに。 ・梅沢、仕事が忙しく疲れてZに来たがシルクスクリーンは刷りたいと言ってはりきる。吉田さんも仕事以外で普通にTシャツ作りたい、と目を輝かせていた。「仕事以外」のゆるい感じを大事にしたい ・基本的な機具をZに常備（濱士さん私物）。 ・次回作業日告知をFBに掲載 ・濱士さんがFBに写真をあげてくれたのを発見　（池田）

グループごとの記録

■定期的なモニタリングと軌道修正の方法

Zでは、「月ーモヤモヤ会」という会議を、毎月ー回のペースで開催しています。これは、スタッフとオノコラーが、Zの運営や企画について話し合う会議です。

月ーモヤモヤ会では、ーヶ月分のふりかえりシートや写真や来場者アンケートの結果を眺めながら、ーヶ月間の出来事や来場者について思い出します。そして、Zにどんな人が来ていて、どんなふうに過ごしているのか、どんな雰囲気なのか、何がうまくいっていて何が課題なのか、これからどうしていきたいか、そのためにはどんなことに心がければよいか、などを話し合います。

「作業日」や「作業グループ」で活動している人には、ーヶ月間の活動とこれからの予定について発表してもらいます。また、これからやってみたいことがある人にとっては、他のオノコラーに相談したり、参加を呼びかけたりする場にもなっています。

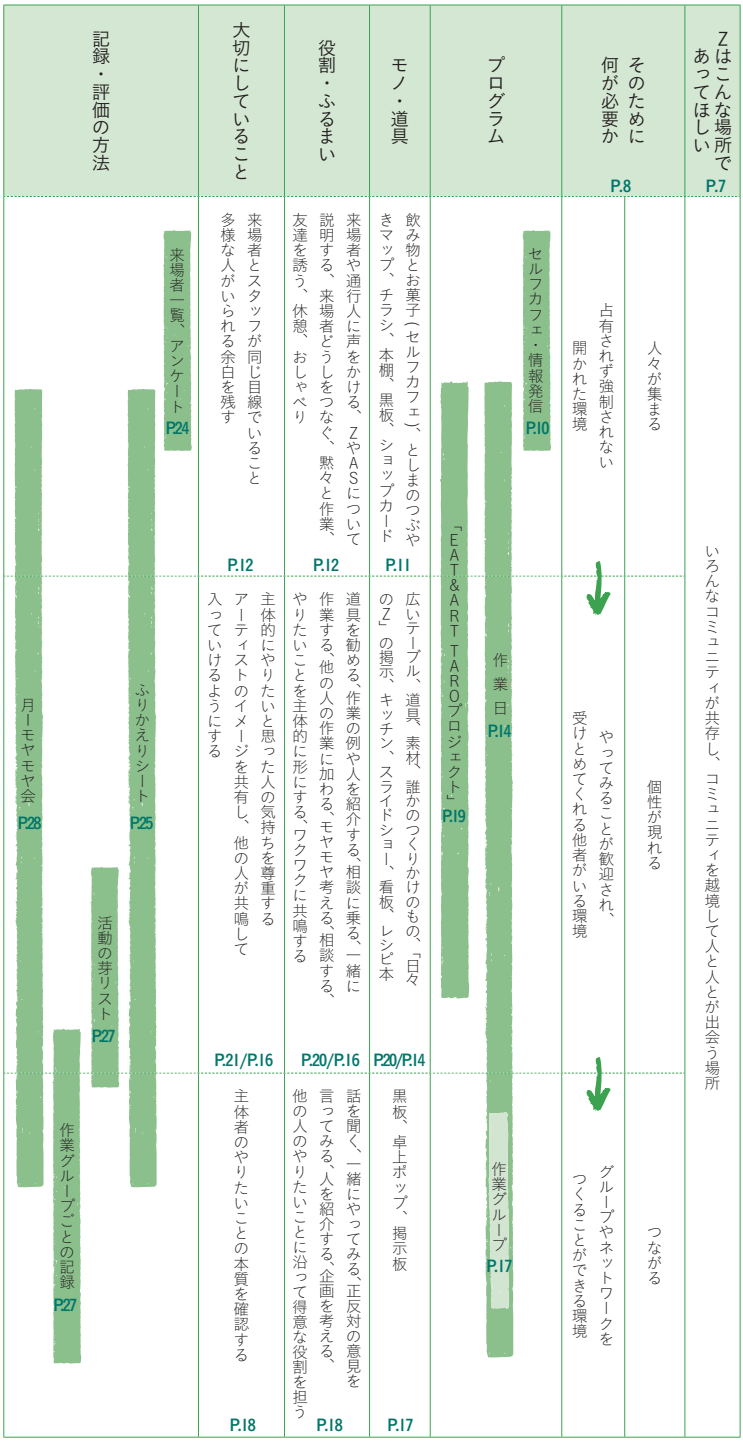
参加者から出た意見や感想は、どんな話をしているのか視覚的に把握できるように、スタッフが付箋にメモして貼っていきます。トピックごとにまとめたり、意見や視点の類似点や相違点がわかりやすいように整理します。

このように、定期的に活動や場の状態をモニタリングすることで、ー日ごとのふりかえりだけではわからなかった傾向や変化が見えてくることがあります。

4. まとめ 編

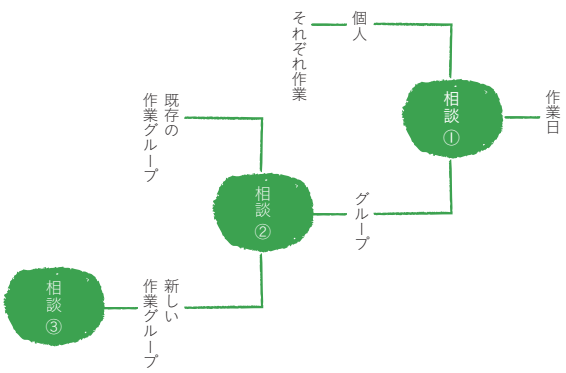
Ⅰ. としまアートステーションZのつくりかた

としまアートステーションZを運営する際に、事務局が考えていること、実際のつくりかた、その残しかたをまとめると、左の図のようになります。各項目について詳しく知りたい人は、それぞれのページを参照してください。



2. 作業日サポートガイドライン

やりたいことや、やりたいこと未満のモヤモヤを抱えてZに来場した人が、それぞれの作業をはじめるためのガイドラインです。事務局は次のようなステップで、対話やサポートをするよう心がけています。



相談1…グループをつくったり参加者を募ったりする必要があるか、個人で完結する作業か。
相談2…新しい作業グループをつくる必要があるか、既存の作業グループでできる作業か。
前者の場合は、その作業が自分と参加者にとっての「準備」になっていることを条件に、新しい作業グループをつくる（準備ではなく発表の場を求めている場合は他の場所を紹介）。
相談3…目的、目標、内容、頻度、メンバーや対象者、告知・連絡手段、記録・報告手段を相談し、主体者がやることと事務局サポートレベルを決め、記録シートを作成。

項目	目的・目標	活動内容	活動頻度	対象者	連絡・告知	当日の運営	記録・報告	次回の計画
主体者がやること	作業グループをつくる目的と目標を言語化し、記録シートに記入する	具体的に何をやるか決め、記録シートに記入する	活動頻度や日時などを決める	グループに誘いたい人、参加対象者を決める	連絡手段を決め、準備する 文面を考え、呼びかける 呼びかけへの応答や質問に対応する	準備をする（しつらえ、道具、卓上ポップなど） 作業する グループメンバー、参加者の巻き込み、対応	写真などの記録物をとる レポートを書く レポートを自分のSNSなどに掲載するか、スタッフに送って掲載してもらう	既に決まっていれば連絡・報告へ 軌道修正が必要な場合は、それについて考える
事務局のサポート	レベル1：相談に乗る レベル2：主体者の言葉を代し、記録シートに記入	レベル1：相談に乗る レベル2：主体者の言葉を代し、記録シートに記入	レベル1：相談に乗る	レベル1：相談に乗る レベル2：人を紹介する	レベル0：主体者におまかせ レベル1：FBでシェアする、Zに掲示する レベル2：連絡・告知するよう声かけする レベル3：MLなどの連絡手段を準備する レベル4：文面の相談に乗る レベル5：やりとりをフォローする	レベル0：主体者におまかせ レベル1：卓上ポップを書くよう促す レベル2：来場者を誘う、つなぐ レベル3：同席してフォローする	レベル0：主体者におまかせ レベル1：FBでシェアする、Zに掲示する レベル2：記録・報告するよう声かけする レベル3：写真を撮って提供する	レベル0：主体者におまかせ レベル1：相談に乗る

活動する上での注意事項
＊非営利活動であること
＊実費程度の参加費を取ることは構わないが、お金の管理や会計は主体者が責任を持つこと（事務局は関与しない）
＊地域の団体と関わるなど事務局の名前で実施する必要がある場合は相談すること
（経費を事務局が負担するかわりに、企画内容に厳密なチェックや制限が入ることを理解してもらう）

3. スタッフの声（座談会）

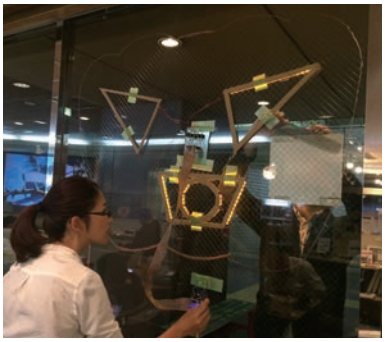
ここまでは、としまアートステーションZの成り立ちを「考える」「つくる」「まとめる」という3つのフェーズにわけて俯瞰的に記述してきました。一方、この座談会では、現場で実際に何が起きていたのかを、スタッフ個人の視点から振り返ってみたいと思います。

■「ふりかえり」と「誰々さん」として見えてくる瞬間

冠：私は来場者によく話しかけるタイプで、最初はみんな当たり障りのない話をするんだけど、興味を持って聞いていくと、自分の大事にしていることを話しはじめる瞬間があって面白い。1日の「ふりかえり」[※1]のときに、スタッフとかオノコラー同士で「あの人こんな人だったよ」みたいな話をするよね。ゴシップじゃなくて、こんな人も一緒にいるんだねっていう話。本当は日常生活で出会う人全員に個性があって、例えば電車で乗り合わせる人もみんな違う人生を送ってる。Zでは、そういういろんな人が手の届くところにいて関わり合えるかもしれないのが面白い。

石幡：「来場者1、2、3」だったのが、「誰々さん」として見えてくるということだね。

冠：それは記録を残してても思うよね。ただカウントするだけの人じゃなくなる瞬間。「ふりかえり」をはじめてから、書くことでより意識されるようになってきた気もする。



池田：（「ふりかえり」の紙を見ながら）大木さんのこと最初は「お茶の人」って書いてるね。いつも来ている「中学生」も出てきてるよ。

冠：うん。大木さんは話したそうに見てるなーと思って、世間話くらいのつもりで話しかけたら、「ここは飲み物あるんですか？」って。「はい、紅茶とか簡単なものは」って言ったら、「紅茶といえば…」ってフリーザーバッグに入った高級な茶葉を取り出して、みんなにふるまいはじめた。話しかけたらびっくりするほどキャラが濃かった（笑）。中学生のみきちゃんは、兄弟が創造館（Zのある施設の名称）に習い事に来てて、お母さんに「勉強も大歓迎です」って言ったの。そしたら友達連れてきた。最初は顔見知り程度だったけど、しまいにはママがここに荷物を預けに来るほどの仲になった。「冠さんいるから大丈夫っしょ」みたいなよくわかんない論理だけど、こっちとしては嬉しいよね。

池田：彼女たちとの距離が一気に詰まった時期があった気がするんだけど。「ふりかえり」の紙にも「中学生」と書かれてたのが名前に変わった瞬間があるはず。

冠：（2014年の）9月に、彼女たちが勉強してる隣でオノコラーが大がかりな作業をしていたら、気にしてる様子だったから声をかけた。同時期に、地域イベント[※2]の準備を手伝ってくれて、ハロウィンイベント[※3]には自ら参加してくれた。

池田：ハロウィンイベント当日には、メインキャラクター的に関

わってたよね。

■オノコラーの参加の変化

冠：オノコラーも、夏まではとりあえず来て過ごす感じだったけど、9月くらいから活動しはじめたね。地域イベントの準備をするよってMLで呼びかけたら、オノコラーが思ってたよりもたくさん参加してくれたことにびっくり。ハロウィンイベントで楽器つくりたいってゆめんに話したら、かめちゃんを誘ってくれたり。

石幡：かめちゃんは、最初そんなに関わると思ってなかった。むしろハロウィンイベントに駆り出されちゃって大変って心配してたけど、大丈夫だったね。本人が言うには、最初は、熱い人たちが集まってるのかなと思って遠目に見てたけど、実際はゆるっとしていて、人とか場の雰囲気がいいから来てるって言ってた。その後オノコラーになったし、Z以外での活動にもたくさん参加してるしね。ゆめんもそれにびっくりしてた。私よりも楽しんでるって（笑）。

冠：松本さんは、一緒にご飯食べに行った時に距離が縮まった気がしたんだけど。

池田：アートに対する知識欲や熱量がとても高い人で、「そのエネルギーはどこから来るんですか?」って聞いてみたら、自分のこと話し出してくれて。旅好きで、バイクでいろんなところ行ってて、一番楽しいのはお祭りに参加することだと。「雑司が谷にもこんなお祭りがあるんですよ」って話したら目が輝いてた。

冠：お祭り一緒に出て楽しそうだったよね。創造館[※4]の文化祭のときは館内いろんなところをまわって、来館者にZのことを説明してくれてて、いつのまにか仲良くなっててびっくりした（笑）。

内野：松本さんっていろんな人に話しかけてますよね。イベントがあると勘違いして来てしまって暇してた日があって、そのときも来場者に話しかけてた。

冠：オノコラーに応募しようかなと思って様子を見に来た高橋さんにも、松本さんが話しかけていた。やたら話が盛り上がってるので「お友達なんですか?」って聞いたら、「いや、いまお会いして」って（笑）。松本さんのおかげで高橋さんがオノコラーになった。

石幡：鈴木さんの関わりかたもよかった。としまアートステーション構想のキック[※5]オフパーティーの準備に参加してくれて、だんだんどういればいいのかわかっていったと言ってた。

冠：鈴木さんは写真をやってるんだけど、ただ展示室を探していたのではなくて、誰かと対話しながら物事をつくっていけるような場所や仲間を探していて、オノコラーになってくれた。そういう人たちがいたからこそ、一緒にキックオフパーティーをどうするか考えたり、そのためのリサーチに行ったりしたんだよね。そのとき、はるさんも参加してくれたね。

池田：はるさんは創造館の利用者で、「前から気になってた」って

寄ってくれた。そのときに受験生の娘さんが絵に興味があるとか、自分の作家活動もしたいけど最近時間がないって聞いて、私が美術予備校で教えてることや作業日のことを話したんだ。そしたら、すぐ娘さんと一緒に絵を描きに来てくれた。最初の目的は作業日で、そこからオノコラーに。

石幡：としまアートステーション構想が目指す「主体性のある公共」というのを、Zなりに言い換えると、「目的外使用」とか「プログラムを横断すること」なんじゃないかって話したことがあったね。与えられたものを消費するだけじゃなくて、その先に自分なりの楽しみかたとか場の使いかたを見つけてコミットしていくのは、主体性の現れなんじゃないかと。いまみんなが話してくれたそれぞれの人たちの関わりかたの変化は、「目的外使用」とか「プログラムの横断」に当たるね。

■作業日でのサポート：本質を突き詰める対話

冠：来場者がそれぞれの活動をはじめられるように、私たち彼らとけっこう対話してるよね。

池田：森久さんが、別のイベントで余ったタコと竹を有効利用したいって持ってきたことがあった。Zはスタッフがイベントを主催する場所ではなくて、森久さんのやりたいことを実現する場所なので、森久さんの作業としてタコや竹を有効利用する活動を考えてほしいと伝えたら、どんどんアイデアが出てきて。そのへんで森久さんは、Zの使いかたを見つけたのかな。私もZでこんなことできると思わなかったから面白かった。彼は、オノコラーになったときから小劇場演劇業界の閉鎖性の話をしてて、別の業界と混ざりたいし場を開くことのノウハウを学びたいって言ってたんだよね。Zでのいろいろな作業を経て、それが最終的には本来やりたかったのれん会[※6]につながったんだと思う。

冠：あと、地域とのつながりを見える化したいという、とおるさんのアイデア。最初は地域イベントに絡めてできるんじゃないかと思って、彼もその提案に乗ろうとしたんだけど、果たしてそれでいいのかと思って彼と話をした。サポートとしては荒療治だったかもしれないけど、誰に見てもらっていようがいまいが、自分が思うやりたいことをここで1回やってみたのは、本人にとっての契機になったみたい。「とおるさんの本当にやりたいことは何なの??」って詰め寄ったときは、だいぶ試された気がしたって、その後、本人も言ってた。

池田：あのとき「ここは厳しい場だから、来るのがつらい」みたいなこと冗談半分で言ってたよね（笑）。

冠：私たちのサポートは厳しくもあると思うんだよね。対話のなかで「本当にやりたいこと」を見つけるために不要なものを落としていって、突き詰めると最後に残るものがある。でも、それを見つけ

ることが、その人の人生にとっては必要ない場合もあるじゃん。Zの外だと逆に、落とされる部分が評価されたりするから。お金が儲かるとか派手さとか。

池田：集客とかお金とかわかりやすさとかね。そういうのを削ぎ落として最後に残る部分を発見するのが大変。特に、お祭りごととかイベントになると、人に来てほしいとか楽しいものにしたいという目標が先に来がちだけど、そうじゃなくて、人が来なくてもいいしやらなくてもいいけど、「あなたが本当にやりたいことは何ですか？」というのが厳しいんだよね。誰かにお願いされたからではなく「自分がやりたいことをしてください」というのが難しいんだよね。

冠：作業グループでは、自分自身のためにやるということと、それを他者に開く意味も同時に問うことになる。ただ人が集まってほしいとか、お金や派手さのために他の人とやりたいではなくて、自分にとっても他の人にとっても意味があるというのは、難しいし厳しい話だなと。

池田：森久さんがのれん会について話してたことが印象に残ってる。彼は劇場の人だから、公演のフォーマットで物事を考えるの。だからこそ、演劇関係者の間で、のれん会みたいなものが継続してこなかった。というのは、集客がなければいけないとか、場所やお金をどうするみたいな話になるから。でもZでやるとあくまで作業だから、集客0でも儲からなくても入退場の時間がゆるくてもいい。それなら続けられると思ったって。演劇関係者だからこそできなかったことがZだったらできるというのが、Zでやる意味だし、こういう会を長く続けていきたいっていう森久さんの希望に沿ってる。集客0でもできるというのは、ハードルの低さでもあるけど大変さでもあると思う。それが、イベントではなくて「作業」と言ってる意味だよね。周りに喜ばれたり評価されたりということが目先にはないかもしれないけれど、やっていたいものとか自分でやらなきゃと思っているものをひとりで考える強さがないと続かない。何かしら芸術的なことをやりたいと言っている人たちのベースはそこだと思う。だからサポートガイドライン（詳細はp.31）って言っても、機械的にできるものでもないんだよね。

冠：その人たちの苦しみを、時に励ましながら見守りたいと思う。

■作業日でのサポート：プロとして素人をやる

冠：そういう企画者タイプの人がいた一方で、初めての状況に巻き込まれることで経験を積んだ運営者タイプの人もいる。一連の地域イベントが終わった後に相原さんが言ってた。「次から次にお客さんが来るような状況は初体験で、その場にいたオノコラーたちとどうにか対応していく一体感やチームワークは面白かった」って。高橋さんも、ハロウィンイベントに子供たちがたくさん来て、過酷な

状況になって。ふたりはその状況を楽しんでくれたと思う。

池田：あの数の子供が来たらオペレーションが成り立たないけど、それを現場に任せちゃうという、よくも悪くも企画者タイプの人たちの詰めの甘さによってできた体験。その場でやりかたを編み出さないといけないことの面白さはあったのかもね。

冠：前に、事務局の役割はプロの素人だっていう話をしたことがあったね。プロとして、あえての詰めの甘さ、人が入り込める余地をつくるということ。

池田：素人感は大事。作業グループは特に。作業グループでは、できるだけヒエラルキーができないように心がけてる。助成金ゼミ[※7]では五藤さんが参加者に知識や技術を提供するんじゃなくて、五藤さんが考えたいことをみんなで一緒に考えるとか、カシオペア印刷[※8]では進士さんがやりたいことをやってもらうために、進士さんに頼りすぎない。議題とか道具をシェアして、「わかんないね」って言いながらみんなで考えたり作業してる。

内野：Zは第3の場所というか、仕事場じゃない場所なんですね。

池田：仕事場にならないように意識してる。カシオペア印刷は危うくて、進士さんはデザイナーだし吉田さんはアパレルの人だから、下手するとお仕事になっちゃうから、それをどうにか外すように心がけてる。教える教えられるの関係だけにならないように。それぞれがやりたいことを持ち寄って、たまたま一緒にいるだけという感じ。

DiY[※9]は真ん中に素人であるうっちー（内野）がいて、それを手助けする人が集まっているね。

冠：私たちはそれをサポートの意識でやってるじゃない？あえてできない感じを良しとしている。で、まわりに頼る。オノコラーがスタッフに対して、「そもそもみなさん何してるんでしたっけ」という疑問を持ちはじめたのも、そりゃそうだよなと（笑）。プロで素人をやってるから、みんなからしたら「この人たちどうやって生計立ててるんだっけ」って話。

■目的を決めすぎない場づくり

内野：やりたいことがあるタイプと巻き込まれるタイプ、Zには両方いて、僕は、誰かのやりたいことがすっと通るわけじゃなくて、それを活動のなかから見つけていく状況をつくりたいと思ってました。最初から「〜つくろう」じゃなくて、話してるうちに「〜つくりたいね」となるような状況。DiYの活動を振り返って思うのは、僕一人ではできないからこそ誰かが助けてくれて、それが新しい体験につながったのかなと。DiYに参加してくれた森久さんにとって、木工作業自体は技術的に新しい体験ではないけれど、Zのいろんな使いかたを思いついていったのは、新しい体験だったと言えると思う。

池田：カシオペア印刷はDiYに近い。真ん中にあるのは目的では

なくて道具。「道具はあるんで適当に来てください」って呼びかけると、使ってみたい人がパラパラやって来て、満足するまで刷ったら帰ってく。誰かが新しい道具を「これいいでしょ！」って見せると、周りの人が「それいいね！私も何か刷ろうかな」となる。そのうち、つくりたいものができて継続する人もいる。そのゆるさと発展のわからなさが面白い。

内野：DiYも活動日だけ決めたら誰かしら来てくれた。何をつくるかはあまり決まってなくても呼びかけちゃって、定期的にその日があればそれらしい話題になるし何かしら起きる。Zに来れば、スタッフもいるし面白いお客さんもいるし。定期的に何かが開催されてることで、そこで話せる安心感がある。のれん会も、森久さんがひとりで来て、たまたま来ていた中学生の相談に乗ったり、別の作業グループの人と話したりしてる。そこから次のテーマが決まることもある。とりあえず来て、何かやってみるのが大切かな。

石幡：アートプロジェクトの残し方・伝え方ゼミ[※10]も、「私、公開作業してるんで一緒にやりませんか」という呼びかけに、その都度共鳴した人が来ていた。グループが続いていくという形式ではなく、活動が続いていくという形式だった。

■作業を開く、共存する、つながる

石幡：やりかけの絵しりとりに小学生のショウくんが興味もって、そこにいた大人たちと一緒に続きをやってたことがあった。ショウくんはもともと勉強しに来てたんだけど、絵しりとりで距離が縮まったね。

冠：思った以上にモノが機能するなって思った。つくりかけのものとか、EAT&ART TAROさんのプロジェクトでできたものとか。特に、電子工作の楽器と廃チラシでつくったドリンクマットが人気。来場者に「これ何？」って聞かれるし、こっちも説明しやすい。

池田：作業の痕跡を残しているのは、作業をちょっと外に開くってことだよね。DiYでは棚の模型を人目につくところに置いてアイデアを募集してたけど、あれはどうなったんですか。

内野：「この模型何なの？」「こういうのつくろうと思ってるんですよ」みたいに話すきっかけにはなりました。実際につくるところまではいかなかったんですけど。

冠：なるべく外から見えるところで活動するのもそうだね。結局テーブルもひとつにつなげたままだしね。最初、外から丸見えの場所で作業してたら、カフェ利用者が入りづらいかなと心配してたけど、全然そんなことなかった。

池田：PC作業してる男性がふたりがけの席に座っていたら、ショウくんが正面に座って勉強しはじめたことがあった。その共存具合はいつも面白い。隣の人のやっていることをチラ見しつつみたいな。個々が閉じてるんじゃなくて、横断するきっかけがあったらい

いなって最初から話してたよね。自然とそうなりはじめた。タコを消費する会に来た吉田さんが、隣でやってたカシオペア印刷に興味を持ったのもそう。

冠：4月とか5月、オノコラーもまだいなくてスタッフしかいないときに、どんな作業をしたらそういうことが起きるかだいぶ考えたね。実現するしないは置いといて「これやってみようよ、集まってみようよ」っていうのはよかったのかな。そういうのがいまにつながってるのかな。いい状態がつくられるまでに私たちがやったことを、来年度はオノコラーとできればいいな。

注釈

※1 **「ふりかえり」**：Zの運営が終わった後、スタッフとオノコラーとで、一日の来場者や出来事を振り返り、寄せ書き形式で記録を残すという取り組み。詳細はP.25

※2 **「地域イベントの準備」**：としまアートステーションZがある地域文化創造館の文化祭や、近隣の商店街が主催するハロウィンイベントにオノコラーとともに参加し、それぞれ企画を実施した。

※3 **「ハロウィンイベント」**：地域イベントのひとつ。近隣の商店会主催のハロウィンイベントに合わせて、としまアートステーションZでは手造り楽器をつくるワークショップを実施した。詳細はP.51

※4 **「創造館の文化祭」**：地域イベントのひとつ。としまアートステーションZがある地域文化創造館の文化祭に合わせて、としまアートステーションZではランチプレートを提供した。詳細はP.51

※5 **「キックオフパーティーの準備」**：H26年度のキックオフパーティーで来場者に振る舞うクレープを、オノコラーと一緒に準備した。

※6 **「のれん会」**：小劇場演劇をめぐるさまざまな課題について考える互助会的な会。詳細はP.52

※7 **「助成金ゼミ」**：助成金との健康的なつきあい方について考える会。詳細はP.48

※8 **「カシオペア印刷」**：シルクスクリーンをやってみる会。詳細はP.50

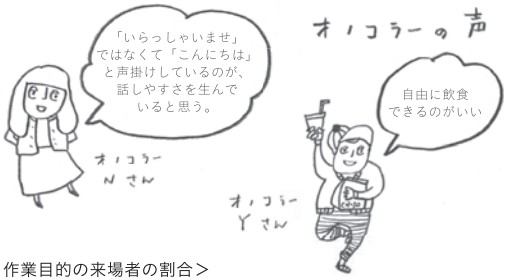
※9 **「DiY」**：アートステーションZに必要な家具を自力でつくるプロジェクト。詳細はP.49

※10 **「アートプロジェクトの残し方・伝え方ゼミ」**：アートプロジェクトの記録方法とのその利用方法について考えたり、としまアートステーションZを題材に実践したりしてみる会。詳細はP.47

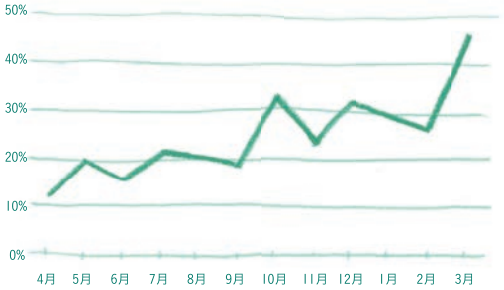
付録: 資料編

Ⅰ. 来場者一覧とアンケートの分析

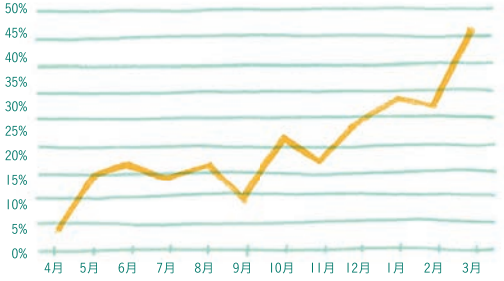
■金曜日（作業を奨励している曜日）の来場者の推移
対象日：2014年4月18日～2015年3月13日までの金曜日（全46日間）
方法：対象日の来場者一覧の記述を、来場目的（休憩／作業）、立場（主催者などの関係者／常連／オノコラー／その他）、来場きっかけ（ふらっと来た、Zめがけて来た）の観点から分類し、作業目的の来場者、常連またはオノコラー、Zをめがけて来た来場者の割合を算出した。



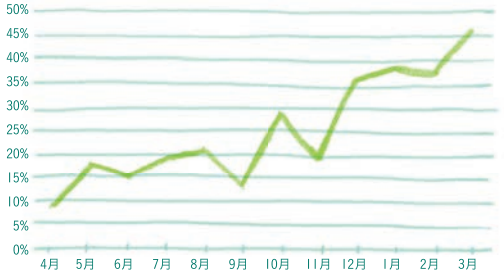
＜作業目的の来場者の割合＞



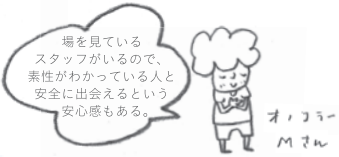
＜常連・オノコラーの割合＞

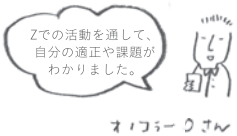


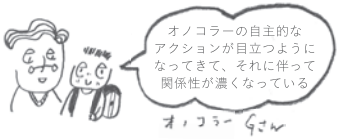
＜Zをめがけて来る人の割合＞



・作業目的の来場者、常連またはオノコラー、Zをめがけて来た。
来場者はいずれも、2014年4月当初は10%前後であったが、
年間通して増加傾向にあり、2015年3月には45%前後まで増えている。



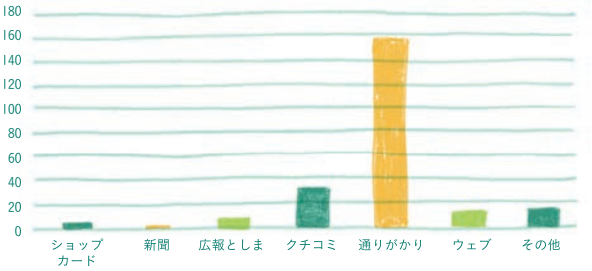




■来場者アンケート

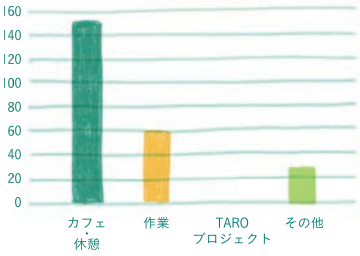
実施期間：2014年9月5日〜11月14日（全31日間）
回答者数：228名
【単純集計】

＜何で知ったか（人数）＞



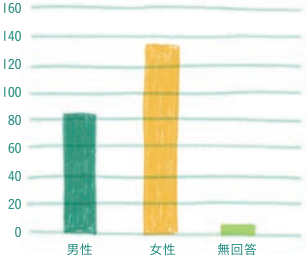
・通りがかり 66%、クチコミ 14%、ウェブ 5%、広報としま 4%で、通りがかって知る人が全体の2/3を占めている。「その他」は「以前から知っていた」や無回答が多い。

＜何をしに来たか（人数）＞



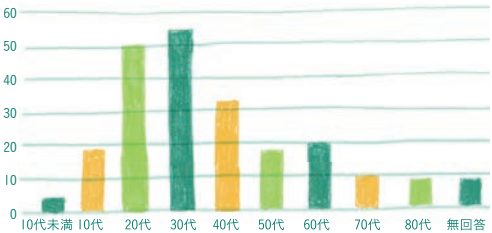
・カフェ・休憩 62%、作業 24%、その他 30%で、カフェ・休憩目的の人が全体の 2/3 弱。「その他」の具体的な回答としては、「落語」「リハーサル」など誤って創造館の利用目的を答えた人が多く、Z の利用目的としては「カフェ・休憩」に該当するものがほとんどと思われる。
・調査実施期間が EAT&ART TAROプロジェクト前だったため、回答者は 0 となっている。

＜性別（人数）＞



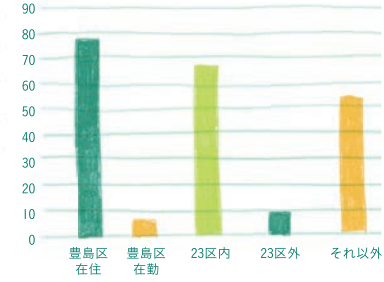
・男性 38%、女性 60%で、来場者は女性が多い。

＜年齢（人数）＞

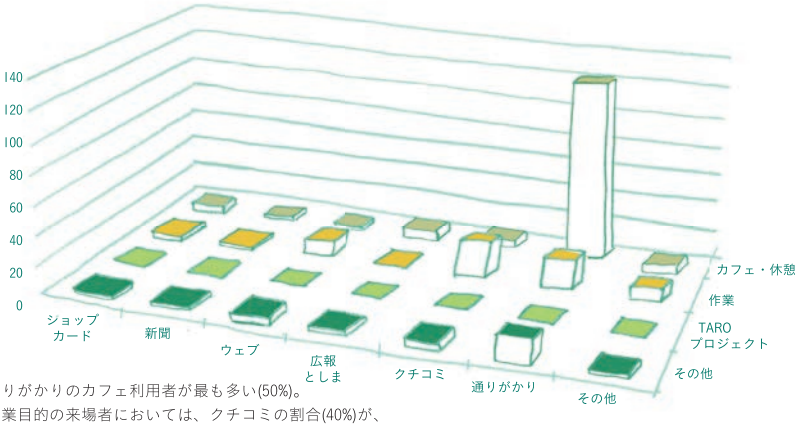


・20代(22%)、30代(25%)、40代(15%)の来場者が多い。

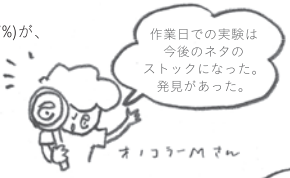
＜居住地（人数）＞

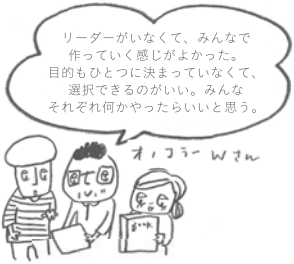


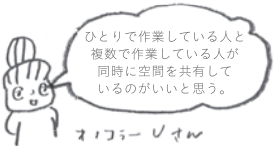
＜何で知ったか × 何をしに来たか＞



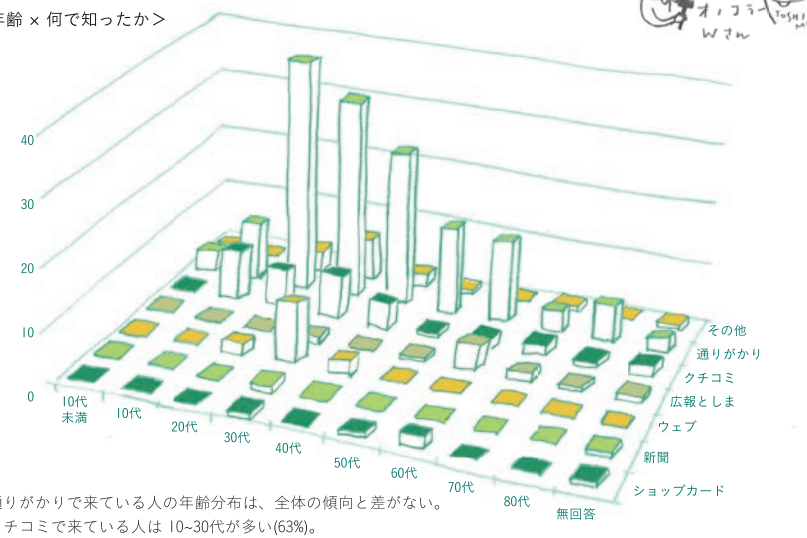
・通りがかりのカフェ利用者が最も多い(50%)。
・作業目的の来場者においては、クチコミの割合(40%)が、全体の傾向(14%)を大きく上回る。
・クチコミによる来場者においては、作業目的の割合(67%)が、全体の傾向(24%)を大きく上回る。







＜年齢 × 何で知ったか＞

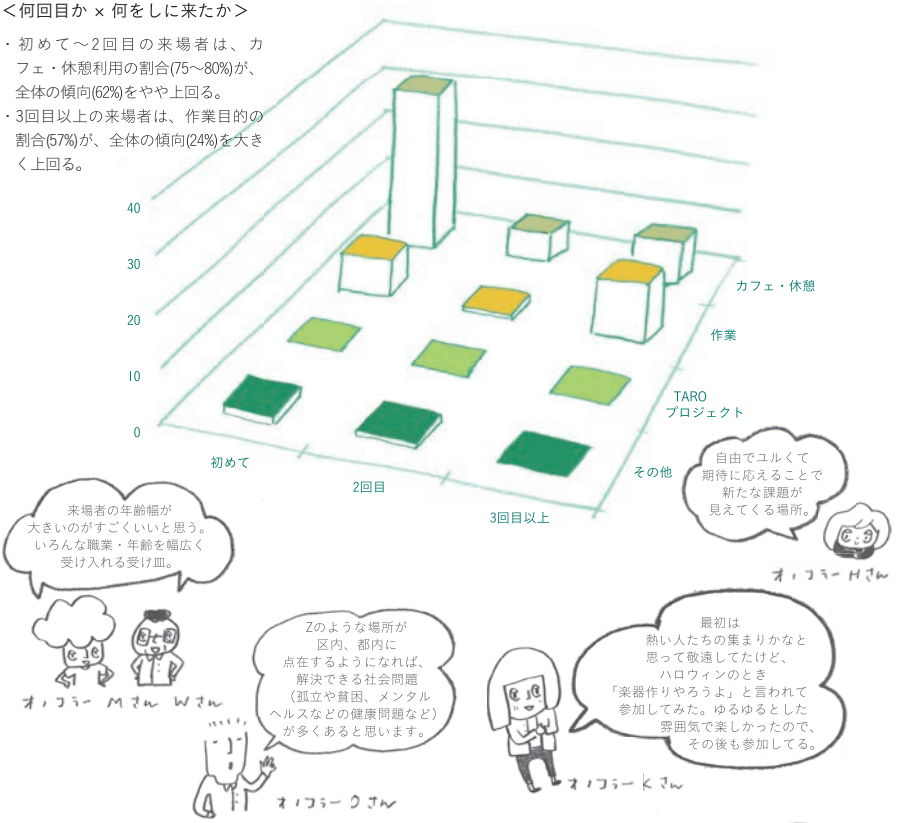


・通りがかりで来ている人の年齢分布は、全体の傾向と差がない。
・クチコミで来ている人は 10~30代が多い(63%)。
・広報としまを見て来ている人は60 代が多い(40%)。
・ウェブを見て来ている層は30代が多い(70%)。

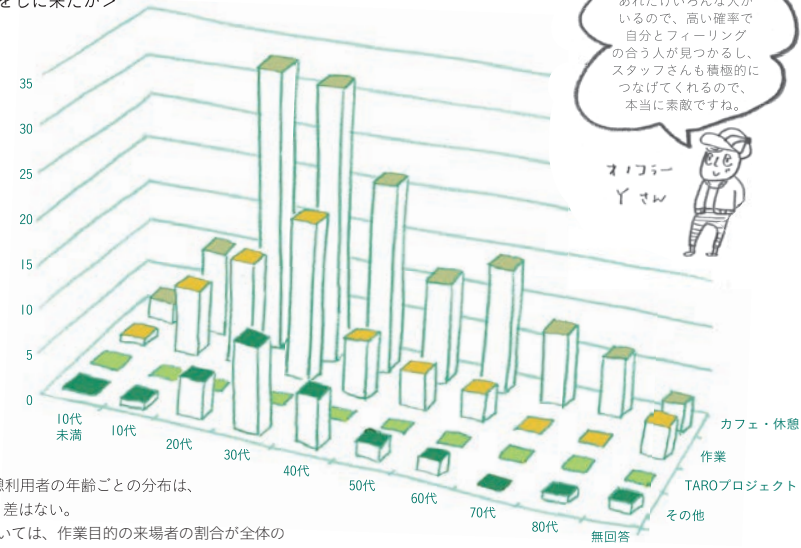
付録：資料編

＜何回目か × 何をしに来たか＞

・初めて〜2回目の来場者は、カフェ・休憩利用の割合(75〜80%)が、全体の傾向(62%)をやや上回る。
・3回目以上の来場者は、作業目的の割合(57%)が、全体の傾向(24%)を大きく上回る。



＜年齢 × 何をしに来たか＞



・カフェ・休憩利用者の年齢ごとの分布は、全体の分布と差はない。
・10~30代においては、作業目的の来場者の割合が全体の傾向(24%)を上回る (10代:42%、20代:25%、30代: 30%)。

2. オープン日、作業日、EAT & ART TAROプロジェクト実施日一覧

■オープン日

2014年4月18日（金）～2015年3月15日（日）
毎週金・土・日曜日 12時～18時

2015年4月17日（金）～2016年3月13日（日）
毎週金曜日 15時～21時
毎週土・日曜日 12時～18時

■作業日

2014年5月23日（金）～2015年3月13日（金）
毎週金曜日 12時～18時

2015年4月17日（金）～2016年3月13日（日）
毎週金曜日 15時～21時
毎週土・日曜日 12時～18時

【行われた作業の例】

・本を読む
・PC作業
・勉強をする、数学を教え合う
・お絵描き
・廃材で工作をする
・ミシンで服をつくる
・編み物
・陶芸の絵付け（創造館を利用している陶芸サークルの人）
・ちとせ橋文化祭の準備（創造館を利用している合唱サークルの人々）
・目白ハロウィンの準備（地域のフラダンス教室の人々）
・ミーティング、勉強会
・楽譜の読み合わせ（創造館を利用しているオケの人々）
・紅茶をふるまう
・ギターを弾く
・来場者がいた痕跡をZ内で可視化する方法を試す
・たこ焼きを消費する会
・そうめんを消費する会
・ソーセージを消費する会
・そば粉を消費する会
・鍋をする
・電子工作
・タロット占い
・流しそうめん
・枝豆を食べる会
・予定を立てる日
・へたっぴ楽団の自主練習
・ベンチをペイントする
・粘土細工のワークショップ
・アイシングクッキーワークショップ
・連詩をつくる
・英語を勉強したり情報交換する会

【作業グループ】

●アートプロジェクトの残し方・伝え方

アートプロジェクトの記録・評価・発信について考える会。「評価研究会」というタイトルで、プロジェクト評価に関する論文を読む会(プレ)を開催。その後、現場に役立つ内容にシフトするため「アートプロジェクトの残し方・伝え方」にタイトルを変更。Zや各自が持っているアートプロジェクトのドキュメントを回し読みして、気になったところや悩みを共有したりした。また、「キッチンスタジオZ〜これ作ってみたかったんだよね〜」を題材に、記録と発信を実践してみる回も行われた。

アートプロジェクトの残し方・伝え方

回	実施日	実施時間	来場者数
プレ（評価研究会）	2014年5月23日(金)	14:00-16:00	3名
プレ（評価研究会）	2014年6月22日(土)	14:00-17:00	2名
1回	2014年9月27日(土)	15:00-17:00	4名
2回	2014年10月18日(土)	15:00-17:00	4名
3回	2014年11月21日(金)	15:00-17:30	5名
実践編	2014年11月28日(金)	12:00-18:00	3名
実践編	2014年12月5日(金)	12:00-18:00	2名
5回	2014年12月13日(金)	15:00-17:30	1名
実践編	2014年12月19日(金)	12:00-18:00	2名
実践編	2014年12月20日(土)	12:00-18:00	2名
6回	2015年1月31日(土)	15:00-17:00	8名

●助成金との健康的な付き合い方を考えるゼミ

2013年度のアートプロジェクトのリサーチャーだった人(現在、オノコラー)が、「経理・経理のサポートをやりたい」とツイッターに投稿したのがきっかけで、ゆくゆく経理・簿記専門のチューターをやるための試行と実験の場として、「助成金と簿記のゼミ」を開催することになった。第2回から「助成金との健康的な付き合い方を考えるゼミ」に改名。アートプロジェクトに限らずさまざまな分野で助成金を取りたい人、取ったことがある人、助成元の人などさまざまな立場の人が集まって、助成金やお金にまつわる悩みや課題について話し合う会になっている。

助成金との健康的な付き合い方を考えるゼミ

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2014年8月31日(日)	15:00-16:30	11名
2回	2014年9月28日(日)	15:00-16:30	9名
3回	2014年10月24日(金)	16:00-18:00	11名
4回	2014年11月28日(金)	15:00-18:00	4名
助成金との健康的な付き合い方を考えるゼミと鍋@Y	2014年12月20日(土)	16:00-21:30	5名
6回	2015年1月18日(日)	16:00-18:00	7名
ゼミの今後を考える回@Y	2015年2月22日(土)	10:30-14:00	6名
助成金との健康的な付き合い方を考えるゼミ（備忘録）と鍋	2015年3月7日(土)	16:00-21:00	6名
7回	2015年9月19日(土)	15:00-17:00	7名
8回	2015年10月31日(土)	15:30-17:30	6名

●DiY

Zの活動に来場者を巻き込むためのきっかけとして事務局主導ではじまった活動。拠点整備も兼ねて、Zで必要な掲示板やチラシラックをつくる作業を来場者を巻き込んで実施することになった。素人同然の事務局スタッフが掲示板をつくろうとしているのを見るに見兼ねて、木工作業が得意なオノコラーが手伝ってくれたり、牛乳パックでつくったチラシラックの模型を人目につくところに設置して来場者とのコミュニケーションのきっかけづくりを試みたりした。

DiY

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2014年7月19日(土)	—	3名
2回	2014年8月1日(金)	—	3名
3回	2014年8月2日(土)	—	3名
4回	2014年8月9日(土)	—	3名
5回	2014年8月30日(土)	—	2名
6回	2014年9月21日(日)	—	2名
7回	2014年9月28日(日)	—	1名
8回	2014年10月3日(金)	—	1名
9回	2014年10月18日(日)	—	3名

●カシオペア印刷

印刷好きのデザイナーがシルクスクリーンやガリ版などの道具を持っていることを知り、シルクスクリーンをやってみたい人が集まるゆるい会がはじまった。開催していくうちに、デザイナーやアパレル関係の人にとっては、仕事ではなくやりたいことをやる場として機能していった。カシオペア印刷でプリントしたものをZに置いておくことで、来場者が興味を持って参加することもあった。2015年度には電子工作の会とのコラボレーションも生まれた。

カシオペア印刷

回	実施日	実施時間	来場者数
プレ	2014年8月1日(金)	15:00-18:00	3名
プレ	2014年8月8日(金)	15:00-18:00	2名
1回	2014年9月5日(金)	17:00-18:00	4名
2回	2014年9月19日(金)	17:00-18:00	3名
3回	2014年10月10日(金)	16:00-18:00	6名
4回	2014年11月8日(土)	16:00-18:00	7名
5回	2014年11月30日(日)	16:00-18:00	6名
6回	2014年12月14日(日)	16:00-18:00	6名
7回	2015年1月23日(金)	17:00-18:00	1名
8回	2015年1月31日(土)	15:00-18:00	3名
9回	2015年2月21日(土)	15:00-18:00	4名
10回	2015年3月6日(金)	17:00-21:00	4名
11回	2015年3月7日(土)	14:00-20:00	3名
12回	2015年3月22日(日)	19:00-21:00	3名
13回（電子工作の会とコラボ）	2015年11月29日(日)	ー	3名
14回（電子工作の会とコラボ）	2015年12月11日(金)	ー	2名

●地域リサーチグループ

地域に関心のあるオノコラーや、地域のお店などと関わるアートイベントをやってみたいオノコラーとともに、Z周辺で開催された秋のイベントに参加した。雑司が谷地域文化創造館の「ちとせ橋文化祭」では、かつてZの場所にあったレストランの架空のメニュー「トシマプレート」を妄想し、雑司が谷の商店街で食材を買い集めて提供した。東目白振興会ハロウィンイベントでは、妖怪をモチーフに楽器をつくるワークショップを実施した。区民ひろば高南の秋祭りでは運営のお手伝いをした。

地域リサーチグループ

回	実施日	実施時間	来場者数
プレ（モヤモヤ会）	2014年8月29日（金）	19:00-21:00	8名
プレ	2014年9月10日（水）	19:00-20:00	3名
1回	2014年9月13日（土）	—	6名
2回	2014年9月21日（日）	—	4名
3回	2014年9月26日（金）	—	5名
4回	2014年9月27日（土）	—	7名
5回	2014年9月28日（日）	—	10名
6回	2014年9月30日（火）	15:00-18:00	2名
7回	2014年10月3日（金）	—	4名
8回	2014年10月4日（土）	—	6名
9回	2014年10月5日（日）	—	2名
10回	2014年10月10日（金）	—	7名
ちとせ橋文化祭「トシマプレートが思い出せません！」	2014年10月11日（土）	9:30-19:00	8名
ちとせ橋文化祭「トシマプレートが思い出せません！」	2014年10月12日（日）	9:30-19:00	9名
13回	2014年10月15日（水）	—	2名
14回	2014年10月17日（金）	—	4名
15回	2014年10月18日（土）	—	4名
16回	2014年10月19日（日）	—	2名
東目白振興会ハロウィンイベント「妖怪楽器をつくろう」	2014年10月25日（土）	10:00-19:00	12名
18回	2014年11月15日（土）	—	3名
区民ひろば高南秋祭り	2014年11月16日（日）	9:00-19:00	8名

●演劇のまじめなのれん会

演劇に関わるオノコラーが主宰する演劇関係者の互助会。制作スタッフ不足、使用後の資材の処分、広報がうまくいかない、観客が内輪になるなどの悩みを共有し、解決策を考え、実践する。同種の会はすでに存在するものの、集まれる場がない、継続しないという問題意識から、Zを拠点に継続を目指してはじまった。主宰オノコラーの知り合いのほか、Zに居合わせた演劇関係者や演劇部の中学生などが参加。「素人が演劇体験をする合宿」なども派生し、Z以外の場所にも活動が展開した。

演劇のまじめなのれん会

回	実施日	実施時間	来場者数
公開うちあわせ	2015年1月17日(土)	13:00-18:00	5名
公開うちあわせ	2015年1月18日(日)	15:00-18:00	5名
1回	2015年1月24日(土)	13:00-15:30	1名
2回	2015年1月31日(土)	14:00-18:00	5名
突発回	2015年2月1日(日)	13:00-18:00	3名
4回	2015年2月7日(土)	14:00-18:00	ー
突発回	2015年2月14日(土)	13:00-18:00	6名
6回	2015年2月15日(日)	13:00-18:00	3名
7回	2015年2月21日(土)	14:00-18:00	2名
8回	2015年2月22日(日)	13:00-19:00	5名
9回	2015年5月8日(金)	ー	2名
10回	2015年5月29日(金)	ー	2名
11回	2015年7月18日(土)	ー	3名

●予定を立てる日

Z演劇のまじめなのれん会の参加者がはじめた企画。毎月シフト提出時期に行う予定を立てるという作業を公開し、参加者とともにカレンダーを見ながら、これからの予定を考えたり、過去の予定を振り返ったりした。後日「TPAMの予定を立てる日」を横浜で行うなど、Z以外の場所にも活動が展開した。

予定を立てる日

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2015年1月23日(金)	—	7名
2回	2015年2月13日(金)	—	7名
3回	2015年3月14日(土)	—	3名

●へたっぴ楽団

楽器経験者がメインの楽器以外で「はじめて」を楽しみながら合奏し、上達を目指さず練習して発表する楽団。主宰オノコラーがZで参加者を募集し、2014年度にとしまアートステーションYの一環で開催した音楽祭で実現した。その約半年後に再結成し、別の地域で行われたアートイベントに出演するなど、としまアートステーション構想以外への展開も見られた。

へたっぴ楽団

回	実施日	実施時間	来場者数
第1回練習	2015年10月2日(金)	19:00-21:00	4名
第2回練習	2015年10月9日(金)	19:00-21:00	3名
第3回練習	2015年10月16日(金)	19:00-21:00	6名
第4回練習	2015年10月23日(金)	19:00-21:00	5名
発表会打ち上げ	2015年11月6日(金)	19:00-21:00	7名

●レコード鑑賞会

レコードを持ち寄って、みんなで聴く会。団塊世代男性の地域デビューについて課題意識があるオノコラーが、レコードをツールにみんなでワイワイ集まれる場をつくりたいとはじまった。自分の家に眠っているレコードを持ってきたり、持っていなくてもジャケットを見ながら話したり、世代を越えた音楽の話で盛り上がったりしていた。地域の公共施設の人にこの企画をプレゼンする機会をきっかけに、Z以外の場所にも活動が展開しそうである。

レコード鑑賞会

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2015年10月18日(日)	12:30-17:30	6名
2回	2015年11月6日(金)	18:00-21:00	8名
3回	2016年2月12日(土)	17:00-	7名

●電子工作の会

電子工作に興味がある事務局スタッフ主導で、電子工作により詳しくなりたいとはじまった活動。電子工作を使ってこんなことをしてみたいというアイデアをZに掲示していたところ、来場者で電子工作に詳しい人が興味を持ち活動に参加。それがきっかけでオノコラーとなり、定期的に電子工作の会が行われるようになった。光る文字盤をつくり、Zに置いたことでさらに興味を持つ人が増え、ハロウィンに合わせて光るジャック・オ・ランタンをつくるまでに至った。その後カシオペア印刷とのコラボレーションも生まれた。

電子工作の会

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2015年6月6日(土)	ー	4名
2回	2015年6月20日(日)	ー	4名
3回	2015年7月4日(土)	15:00-18:00	3名
4回	2015年7月19日(日)	15:00-18:00	3名
5回	2015年8月9日(日)	12:00-15:00	5名
6回	2015年8月23日(土)	ー	4名
7回	2015年9月12日(土)	ー	6名
8回	2015年10月18日(日)	13:00-17:00	3名
9回	2015年10月31日(土)	ー	2名
10回(カシオペア印刷とのコラボ)	2015年11月29日(日)	ー	3名
11回(カシオペア印刷とのコラボ)	2015年12月11日(金)	ー	2名

●シップ & ペイント

絵を描くのが好きなオノコラー主導ではじまった、海外でよく行われているという、ドリンクを飲みながらみんなで絵を描く会。リラックスした状態でみんなで絵を描くことで、ひとりではなかなか生まれないグルーブ感が生まれていた。毎回必ず、初めてZに来る方を巻き込んで開催されていた。カシオペア印刷とのコラボレーションも生まれていた。

シップ & ペイント

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2015年4月24日(金)	18:30-21:00	8名
2回	2015年5月15日(金)	18:30-21:00	8名
3回	2015年7月10日(金)	19:00-21:00	10名
4回	2015年8月7日(金)	19:00-21:00	10名
5回	2015年10月30日(金)	19:00-21:00	3名

●コソコソうちわ会

アニメ好きのオノコラーと事務局スタッフが、アニメや漫画の話で盛り上がったことがきっかけにつくられた会。なかなか普段は大声で話せない、好きなアニメの話をコソコソと思う存分語り合っていた。Zのプロジェクターもうまく使うことで、来場者が興味を持ちやすい環境をつくっていた。オノコラーのなかにもアニメ好きが多く、普段なかなかZの活動には参加していないオノコラーがZに来るきっかけをつくっていた。

コソコソうちわ会

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2015年8月7日(金)	18:30-21:00	6名
2回	2015年10月16日(金)	19:00-21:00	7名
3回	2015年10月30日(金)	19:00-21:00	6名
4回	2015年11月21日(土)	13:00-18:00	5名
5回	2015年11月22日(日)	13:00-16:00	3名
6回	2016年1月17日(日)	16:00-18:00	5名
7回	2016年2月14日(日)	15:00-18:00	14名

●ゲーム研究会

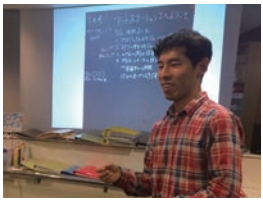
おすすめのカードゲームやボードゲームの話をしたり、実際に持ち寄ってやってみたりして、どんなところが面白いのかなど、ゲームへの愛を語り合う会。オノコラー同士が知り合ったり一緒に活動したりする場をつくるため、共通の趣味・関心事であるゲームをテーマに事務局スタッフが呼びかけてはじまった。ゲームに詳しいオノコラーが案内人になってゲーム売り場を見学したり、誰かとやってみたかったゲームを持ち寄り、やってみたりした。

ゲーム研究会

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2015年11月8日(日)	18:00-20:00	5名
2回	2015年11月15日(日)	15:00-18:00	8名
3回	2015年1月10日(日)	15:00-18:00	6名
4回	2016年1月30日(土)	13:00-18:00	5名

●JMOOC無料の大学講義

大学講義を無料でネット配信しているサービス（JMOOC）を、より多くの人に知ってもらいたいオノコラー主導ではじまった企画。インターネット上だけで勉強するのではなく、ミートアップをすることで、勉強好きと出会ったり、お互いに感想を話したりしていた。オノコラーのZで開催したミートアップに参加した来場者が、自分でもJMOOCミートアップをZで開催するなど、自発的な活動がさらに自発的な活動を生み出していた。



JMOOC 無料の大学講義

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2015年12月11日(金)	19:00-21:00	3名
2回	2015年12月12日(土)	16:30-18:00	2名
JMOOC×FP ～子どもに対する金銭教育を考えよう～	2016年1月30日(土)	13:30-16:30	6名

●わらしべ長者プロジェクト

わらしべ長者の童話のように、次から次へと物々交換をしていくプロジェクト。事務局スタッフとオノコラーの間で盛り上がり、はじまった。スタートは「しまうまのキーホルダー」で、そこから少しずつ交換されていっている。ゴールの目標は「家」だそう。Zの受付近くに掲示していることで、興味を持つ来場者も多い。

わらしべ長者プロジェクト

回	実施日	実施時間	来場者数
1回	2015年7月12日(日)	―	2名
2回	2015年9月4日(金)	―	2名
3回	2015年9月18日(金)	―	2名
4回	2015年10月18日(日)	―	2名
5回	2015年11月1日(日)	―	2名
6回	2015年12月4日(金)	―	2名

【EAT&ART TAROアートプロジェクト】

●ぐるみでクレープ

2014年度のとしまアートステーション構想のキックオフパーティーに向けて、アーティストのEAT&ART TAROがオノコラーとともに実施した食の企画。Z来場者から聞いたクレープにまつわる思い出に触発され、思い出をまるごとくるむクレープを提供することになった。オノコラーとともにリサーチや準備を行った。

ぐるみでクレープ

回	実施日	実施時間	来場者数
雑司が谷リサーチ	2014年6月27日(金)	ー	5名
原宿リサーチ	2014年6月28日(土)	ー	3名
池袋リサーチ	2014年6月29日(日)	ー	8名
パーティー準備	2014年7月4日(金)	ー	11名
後夜祭	2014年7月5日(土)	ー	6名

●キッチンスタジオZ〜これ作ってみたかったんだよね〜

アーティストのEAT&ART TAROが、所有するレシピ本からつくってみたかった料理を選び、レシピ通りにつくって動画を作成するというプロジェクトを実施。調理や撮影を補助するアシスタントや、試食をする参加者として来場者を巻き込んでおこなった。「カシオペア印刷」がスクリーンプリントでチラシを作成したり、「アートプロジェクトの残し方・伝え方ゼミ」が写真や動画やSNSで記録と発信を試みたりと、Zで活動する作業グループとのコラボレーションも生まれた。

キッチンスタジオZ〜これ作ってみたかったんだよね〜

回	実施日	実施時間	来場者数
パン雑炊	2014年10月31日(金)	13:00-17:00	7名
洋風チャップスイ	2014年11月21日(金)	12:00-18:00	13名
ヤンソンの誘惑と ピット・イ・パンナ	2014年11月28日(金)	12:00-18:00	13名
ビーフストロガノフ	2014年12月5日(金)	12:00-18:00	17名
ウクライナ風飾り卵	2014年12月19日(金)	12:00-18:00	12名
純外国産幕の内弁当	2014年12月20日(土)	12:00-18:00	15名

●EATステーションZ

「キッチンスタジオZ〜これ作ってみたかったんだよね〜」に参加したオノコラーが中心となってはじめた食に関する派生企画。おすすめの食べ物を紹介したり、食べ比べたり、参加者と一緒につくったりしている。

EAT ステーション Z

回	実施日	実施時間	来場者数
プレ	2015年1月17日(土)	—	6名
TAROプレゼンツ「野菜スープを作って動画を撮る」、doggyプレゼンツ「赤根ほうれん草を使った簡単料理」	2015年1月23日(金)	12:00-18:00	2名
「菊水堂のポテトチップス食べ比べ」	2015年3月14日(土)	—	2名
「すき焼き」	2015年3月15日(日)	14:00-18:00	8名
「羊羹とお茶」	2015年4月26日(土)	—	5名
「羊羹食べ比べ」	2015年5月1日(金)	—	1名
「ブルーマウンテンNo.1コーヒーと、菊水堂のポテトチップス食べ比べ」	2015年6月19日(金)	—	1名
「ブルーマウンテンNo.1コーヒーと、菊水堂のポテトチップス食べ比べ」	2015年6月20日(土)	—	2名
「鴨汁(鴨南蛮)蕎麦」	2016年2月12日(金)	—	7名

■としまアートステーション構想とは

豊島区民をはじめとする多様な人々が、区内の魅力あふれる場所で地域資源を活用し、当事者として主体的にアート活動を行い、その活動がさらに多くの人々の主体性を生み出す。そんな新しい公共活動のあり方を目指し、個々人の自発的なアート活動を支援することで、地域や人々の想いをつなげるシステムづくりを目的としています。自然に発生したささやかなアート活動が結び付き、人や街とともに暮らすことができる、そんなきっかけをつくり出すための文化事業です。 本事業は、豊島区文化政策推進プランのシンボルプロジェクトである「新たな創造の場づくり」のプログラム及びアーツカウンシル東京事業「東京アートポイント計画」の一環として、東京都、豊島区、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人オノコロの連携により実施しています。
http://www.toshima-as.jp

■豊島区の文化政策とは

豊島区は 2003 年 3 月に策定した「豊島区基本構想」のなかで、文化によるまちづくりを基本方針の柱の一つとして位置づけ、2005 年 9 月「文化創造都市宣言」、2006 年 4 月に「豊島区文化芸術振興条例」を施行、区民・NPO 法人・企業・大学等地域の人々とともに、「文化の風薫るまち　としま」の実現に向け、様々な文化施策・事業を展開しています。このような長年にわたる取り組みが高い評価を受け、2009 年 1 月に東京都で初となる「平成 20 年度文化庁長官表彰〈文化芸術創造都市部門〉」を受賞しました。

■東京アートポイント計画とは

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育成します。
http://www.artscouncil-tokyo.jp

■一般社団法人オノコロとは

文化及び芸術の振興を通じ、地域社会の発展に寄与することを目的として、2013 年に設立。文化事業を通して、市民が「当事者意識」を持つことで主体的にまちに関わり、自らがネットワークやコミュニティを「自分ごと」としてつくり出すために、地域が活気にあふれ、市民が自発的な活動を継続的に行える仕組みづくりを行います。2013 年 9 月より、としまアートステーション構想の運営に参加。

主催：東京都、豊島区、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人オノコロ
協力：日本大学佐藤慎也研究室

としまアートステーション Z のつくりかた

発　　行　　日　2016（平成 28）年 3 月 31 日
監　　修　　佐藤 慎也
編 集 ・ 執 筆　石幡 愛、冠 那菜奈、池田 あゆみ、内野 孝太、神田 亜利紗
写　　真　　としまアートステーション構想事務局、矢部 朱希子
デ ザ イ ン　進士 遙
発　　行　　としまアートステーション構想事務局
〒 171-0032 東京都豊島区雑司が谷 3-1-7
千登世橋教育文化センター BIF
としまアートステーション Z

豊島区×一般社団法人オノコロ×東京アートポイント計画

としまアートステーション構想

Toshima Art Station Koso